

2011年1月7日

会員・関係 各位

特定非営利活動法人 KHJ 香川県オリーブの会  
連絡先 TEL・FAX 087-843-9877 (川井)

ホームページ <http://khj-olive.com/>



### 寒中お見舞い申し上げます

がスタートしました。昨年12月の講演時に山田氏（京都オレンジの会）から貴重な提言を頂きました。（5Pに掲載）  
そこで今後の会運営（特に若者支援）について、皆さんの  
お知恵とお力を存分に發揮して頂きたく、提案用紙を同封致しましたので、1月例会時にご持参  
くださいますようお願い致します。また、役員の方の立候補もお待ち致しております。  
本年もよろしくお願ひ致します。  
1月の月例会を下記の通り開催いたしますのでご案内申し上げます。

## 第103回月例会ご案内

- |        |                                                         |
|--------|---------------------------------------------------------|
| 1) 日 時 | 1月23日(日)                                                |
|        | 13:00~13:30 受付                                          |
|        | 13:30~13:40 報告・連絡                                       |
|        | 13:40~15:00 <b>テーマ「当事者と家族が元気になるための<br/>コミュニケーション支援」</b> |
|        | 講師 香川大学教育学部 准教授<br>臨床心理士 竹森元彦氏                          |
|        | 質疑応答                                                    |
|        | 15:00~15:15 休憩                                          |
|        | 15:15~16:30 <b>全体話し合い（竹森先生指導）</b>                       |
| 2) 場 所 | 香川県社会福祉総合センター <b>6階</b> 研修室<br>TEL 087-835-3334 県庁の斜め向い |
| 3) 参加費 | 無料（財団法人 倶進会の助成を受けています。）                                 |

### 【今後の月例会】

- 2011年2月20日(日) 香川県社会福祉総合センター 6 F (13:30~16:30)
- 2011年3月27日(日) 香川県社会福祉総合センター 6 F (13:30~16:30)

### 【居場所活動予定】

- 1月 8日 (土) 第9回運営委員会 (13:30~16:00)
- 1月 8日 (土) 松田勝先生 個人カウンセリング (9:00~14:00)
- 1月 16日 (日) (13:30~16:00) ・ 30日 (日) (13:30~16:00)  
ポパイの会・パソコン教室 (指導 森下氏・井上氏)

### 【ポパイの会 (若者グループ) から】

11月は親の会の月例会に出席、兵庫県の若者3人(女性)とお互いにメール交換したり、おしゃべりなどして交流、12月も親の会に出席、そのあと京都オレンジの会の若者3名と懇親会に出席しました。居場所でのパソコン教室はMicrosoft Office 2007 Wordのテキストを使って文書作成の応用を勉強し、Word文書内に別の文書を挿入したり、文書内をセクションで分割してそれぞれ別の書式設定を行った。オリーブの会の年賀状も自分たちで作成することができました。

興味があれば一度見学してみませんか。お待ちしております。(独法)福祉医療機構 地域活動支援事業)

### 【前回のひきこもり支援講演会&若者トーク (12月19日) より】概要

テーマ「子ども・若者育成支援推進法から見た支援とは！」

NPO法人京都オレンジの会理事

京都府パーソナル・サポートセンターチーフPS

山田 孝明 氏



### 【一部】

◇「子ども・若者育成支援推進法から見た支援とは！」：最初に民間でやっているビデオ(6年前に厚労省援護局へ京都オレンジの会を紹介した活動ビデオ：友よ 共に未来を生きよう)を流しましたが、それを行政でやりなさいという法律だと思います。

この法律は全く機能していないのではないかと。これから5年、10年後は分からない。一昨年この法案が成立した時、これでひきこもりの人たちは実際そのようになるのかなと思ったが、行政機関の人が何かをしなければならぬとしたら、途方もないアイデアとか元気にさせるそういうものが必要になる。法律に則って若者支援を考えようという動きですが、一例として京都市がチャレンジを始めました。(チラシ：平成22年10月1日から子ども・若者総合支援を開始!!) 参考。協議会に出てオレンジの会から5名出て今後において動き始めています。

相談業務は行政でもできる。(アドバイスだけで動ける若者は、窓口で十分) このあとの

**元気にさせる**ノウハウが大切。(意欲をもって若者を社会に!)

これが大きな課題になるし、このノウハウを若者たちが身に付けるとすれば、どうするのかというのが大変なことである。

○社会を見る目が歪んでいたり、すごく傷ついた若者もいる。

○元気になる過程で、やはり社会は信頼出来るんだという心を育てないといけない。いろんな若者がいて、社会に出られるようになるためにはいろんな課題がある。

こういうノウハウが行政のなかで培っていけるのか。京都市が望んでいればノウハウを提供したり、一緒にしたいと思っている。8~10年程前に京都市が「こころの健康増進センター」をつくることになり、でも親が集まらないというのでオレンジの会を休みにして、相談のため沢山の人がその親

の会の教室に集まって、社会福祉士、カウンセラーの人たちがいろんな話を聞いたりして、始めてどんな家族に対して本当はこういう助言をしたほうがいいのではないかとというノウハウを10年経って身に付けたわけです。そういう経験を経て行政のなかで居場所も必要だと分かり、月に1回しか仲間の会がなくても、それをどうしたらいいか、ノウハウを身に付けていくその過程が大事である。高松市や香川県がどんな動きをしているのか分からないが、今後の課題で、いろんな先進的に活動した時は、全くモデルのないところで、どうやって始めようという、この気概が大切である。無縁社会を支えているのは単身化の世帯で20%（NHKテレビの放送）くらい、2030年には40%を超えるだろうと言われている。少子化で結婚もしていない人が増えている。僕は集まった若者に対して、単身化の生き方をすれば駄目だ、とにかく何とか工夫してでも人と生きられる、それが生生活動運動だと話している。

◇ひきこもり地域支援センター：本当に動き始めているのか、これからの課題になかで、非常に難しく問われる。難しい時期に入った。皆さんもこの10年で高齢化しているし、ゆっくりだけど、どうしたらいいかという足元をみるということは、非常に難しいかも知れないが、何かこの契機にどこかでしっかりと行政と自分たちはどうしたいとか、そういうものが非常にあるときなのかも知れませんね。

◇オレンジの会設立：1995年京都オレンジの会設立（任意団体）。京都東山三条に月1回30名程度悩み困っている親たちが集まってきた。（最初に集まり始めたのは20年程前から）

ひきこもりが社会問題化したあと、短絡的にひきこもりという言葉が使われた時、社会は知らなかった。それまで知らされなかったし、見えなかった。また文字として表されなかった。

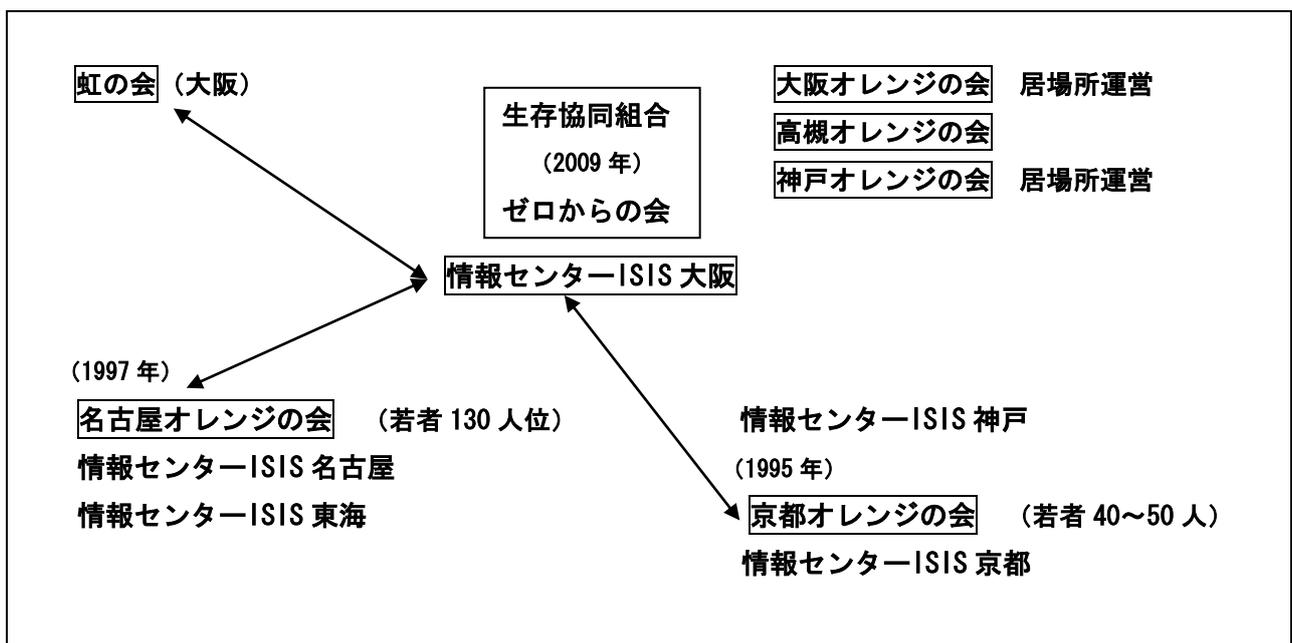
ひきこもりとは何だろう！ 親たちが社会の中で親たちの居場所を作っていた。

○一番大切なのは、まず家族の孤立を防いだ。この問題が解決しなかったら一家で心中したいという家族までいた。

○月1回集まっていることにすごい意味があると親たちが感じるようになる。

○自分たちだけではないと親たちが気付いた。

◇私たちのネットワーク：



- 京都オレンジの会の就労のモデル、作業所の設立の仕方のモデルがあったため、多くの家族会が真似して次に進むことができ、すごく恩恵を受けている。
- 32,000人近くの身元不明の死体が孤独死、警察が身元を突き止め分かったが31,000人が引き取り手がない。(NHKテレビの放送) 無縁死、無縁社会。
- 20年後にでも残したい希望のある言葉 **生存協同組合**、お金を出資するのではなく、生きる意欲を出資。現実的にどうなるか分からないが。

◇若者の居場所作り：

- 設置場所の確保。(家族が運営維持に協力しようということで)
- 運営費用の家族負担はどうする。
- 家族会が広報してやっていることに理解を求めようと、当然専門家の支援も。  
安定した運営ができるか課題であった。そのために社会的認知してもらうためにNPO法人化→共同作業所設立→居場所の確保。
- 居場所→安心して家族以外の人と話せる場所。  
イヤなことはイヤと言える自己表現、親に対しても、noを聞いてもらえたらyesが出てくる。noも言えないためにyesも言えない。訓練された場で獲得出来ないものもある。
- 社会的日常生活ができた。  
ひきこもっている若者は自分が作った時間、自分が支配している時間のなかで生きている。すると、生理的にいろんな問題が混乱してくる。自律神経がくずれていく可能性がある。他人の時間に合わせる。他人とどこかに行く。自分が決めた場所に行く。行ってみようとする。いろんな意味で苦しんでいるところから解放される。但し病気は病気で残っているから医者とどうするか。
- 元気になるソフトがある。ソフトがしっかりしていたら若者に生存保障。  
非正規の若者が職を失って住む場所を失う。これを援助しなければネットカフェの難民とか、若者が都会のなかでホームレス化する。その時にセーフティーネットとして雇用保険や失った住宅の小口の貸し付けをしたり、最後のセーフティーネットとして生活保護を保障しよう。確かに制度はあるが、一番我々が望んでいるのは「こんな僕でも生きていいのだろうか」と言った時に、社会のある場所が「いいんだよ」とそういう言葉を受け止めて、他の間違った場所へ行けば「お前みたいな奴 なんで生きてんだ」と言われる場所があるかも知れないけれど、やっぱり若者の居場所というのは「そういうものがちゃんとある」生存保障のメッセージをだしてくれる場所。お金よりも若者はもっとそういうものを望んでいる。
- 家族関係が修復していく。  
親が努力しなくても若者が生きなおして自分を取り戻したら自然に回復する。親が努力して修復するケースより多いし、早く修復する。

◇情報センターISIS設立：「元気になってほしい」から、のど元過ぎると一緒にいた苦しさを忘れて、子どもに対して相談を受けると「いつになったら、うちの子アルバイトしますか？」という相談に変わる。それより正直言って「うちの子は本当に心に思っていることを話せるようになりましたか？」とか「うちの子は仲間の中で馴染んでいますか？」とか、そういう質問をしてくれたら「あー、この親は知ってるな！」と思う。しかしニーズがあるのだったら会全体が動かなければと思って、イシスという場所、8年前京都府から助成金を頂いてつくったのが**ジョブコーチ職親**、当時は先駆的な言葉で今はハローワークなど行政で使われるようになった。厚労省から法律用語にあるからとクレームが付いたが、「死んだ言葉」としてあっても仕方ないので「生きた言葉」にしようと、現在 京都

府で職親になっていいと、若者を受け入れるという80の会社や営業所がある。うまくいくかどうか分からないが、社会の隅々で「みんなのこと待っている」「一緒に考えよう」という、そういう世の中全体を何か一つひきこもりの人の理解をもつ、やはり「チャンス」とか「体験」「経験」というのは、ものすごく重要な役割ですから、そういう親和性をもった人たちが社会に沢山いるんだということが分かるだけでも、若者たちにとって「あー ちょっと生きやすいかも知れない、安心だ」というのが職親です。

◇情報センターISISをつくって初めて思ったこと：今までは家族会を通して家族のご子息が来ていたのが、次に居場所にきたのは全く家族を通してなくて、本人がダイレクトに「僕 ひきこもっていたけど仕事がしたい」というケースが増えてきた。その根底には「親子関係は全くなく、くずれている」でも本人だけは、「何とかしたい」という思い、と同時に親子関係はそれ程困難な状況でなくても、親が動いていたから、本人が「自分で何とかしないといけない」と思った若者がかなりいた。このようなことから就労の若者を何とかしなければいけないという就労のメッセージがあり、それを機にサポートステーションなど全国的に広がった。

(山田孝明氏より提言)

全国の若者へ向けて一つひとつの積み重ねが始まっているのではないのでしょうか。香川でも工夫しながら、これだけのご家族が来られて、どうしたらいいのかというのは、やはりしっかりと考えていかないと。行政の人から成功例などいろんな話を聞きながら、親の会も一緒になって知恵を出す。これからは本当の意味で集まってるだけではなくて、もう一度実務的にしていく時期に入るのはないのでしょうか。僕は一番うれしいと思うのは、沢山の社会経験を積んでいる大人の男性の方も一緒に、こういう人たちがしっかりと何か一緒に動くことが出来たり、いろんな経験の中で知恵を出し合えば十分可能だと思っています。



【二部】

◇若者トークから一部抜粋

A：スタッフの研修をしている30代男性、生活力、生きがいを教えてもらわなかった。

今思うと小学校低学年頃から強迫性障害の兆候がでていたが、先生は気付かなかった。大学生になって一人暮らしするようになって下宿の階段の足音も不安で仕方なかった。小さい時期に兆候があれば、早期発見、早期対応がされるといいなと思った。3年くらい前に会社を辞めた。行くところも毎日決まっているし、時間も自分が決めた時間に出かける。今思うと社会的ひきこもりが2年半。強迫性障害から救ってくれたのが友達だった。

大学3年のとき、クラブ、カラオケ、ダーツ、マージャンなどに誘われて行っているうちに動きが良くなっていった。投薬は必要で半年で治ったが、その後のフォローを医者はしてくれない。それを居場所であったり、イベント開催したり、飲みに行ったりとかそういうところから社会復帰できた。大学中退しバーテン、会社員も2年半、小さい頃父親から溺愛されていた。3ヵ月に1回から2週間に1回家庭内暴力を起こすようになり、警察沙汰になった。山田氏が身元引受人になってくれた。僕は結果的に良かったと思っている。僕は母親が好きで今も電話で話すと楽しい。父とは合わなかった。夜中トイレに行く足音がうるさいから、トイレに行くなと言われた。

自殺未遂をしてからは、父は何も言わなくなった。恋愛、結婚はハードルが高い。収入がない。恋愛とか結婚する気持ちは大切と思うが今はない。彼女ができれば変わると思うがそれだけで解決できない。当事者にはそういうことも伝えていきたいと思う。

B：30代の男性。22歳の時会社を辞めた。アルバイトもした時期もある。ひきこもりから脱出したと言われるが、自分自身はひきこもっていた時期とあまり変わってないと思う。

Q：Bさんのひきこもったきっかけは？

B：会社に勤めて1年と少ししたときから殆ど眠れなくて、毎朝もどしてしまっていた状態で、その後1年くらい勤めたが無理だということで会社を辞めた。会社を辞めたら体調が良くなった。2年くらいはフリーターで、きっかけはよく覚えていない。5、6年は自分の部屋から出なくて、トイレくらいしか出ない。その間の記憶が殆どなく覚えていない。30歳過ぎた頃から、自分がおかしいと思うようになって、自分で精神科へ通うようになり、そこの先生に名古屋のオレンジの会を紹介して頂いて3年通い、今年の4月から京都オレンジの会にお世話になっている。

Q：Bさんの10年前の自分と物の見方とか将来に対する考え方、希望に変化があるか？

B：基本的には変わっていない。何が違って部屋にいたのか、考えれば考える程分からなくなってきて何が違うのか分からない。京都に来て一人暮らしして考えることが多くなったが、変わっていないというのが結論です。

Q：7年くらいまともに息子の顔を見ていないが、声かけはできるだけするようにしている。返事はないがそうすることが良いのかどうか？

A：家族で何とかしようと思ってもうまくいかないことが多いので、第三者に頼んでみてはどうか。

Q：ひきこもっている時と京都に出てきた時と自分が変わってないと言われたが、親から見たら少しずつ変わっていったのではないかと思いたいが、いろんな方とオレンジの会で接するなかで自分自身の寛容さが磨かれていったのかなと思いつつお聞きしました。

B：人間と見られてない、何が出来るかと考えると何も出来ない。居ていいと思えるようになったことが大きいのかなと思いました。

「表面の変化とかではなく本質的なものは変わっていない、それはそれで素晴らしいことだし、表面の上で自分はオレンジにいてもいいんだと思えた自己肯定感が、本質の上に彼が身に付けることが出来たということは、今日の話聞いて良かったなと思いました。」(山田氏)

Q：訪問支援とよく言われるが、山田さんは何件位されているのか？

「ここで20件位訪問している感覚、1件1件具体的に個人の部屋に行く場合もあるし、心を揺さぶらないと駄目、どこかでハッとするような。第三者が入らなければならないというが、事件になったりビジネスに発展したり、最初に言った人の言葉を超越するケースがある。出来れば社会化したい、これは自分の問題だとする、もう一人の自分が見ている。ひきこもりの若者の多くは親に対抗したり、親に何かを拗ねたりいじけたりして、そういうもので壊れて、問題は自分のなかに無くて親にあるというなかで、気が付かないうちに長期化している可能性がある。これは第三者が支援するのではなくて、第三者のもう一人の自分の見方を援助することが大切である。本人が、これは自分の問題で自分で解決しなければいけないとか、そういう意識になった時しか出てこれない。それは応援します。体験を話したり、客観的な人の話の文章を置いていたりする。自分の問題として動いた結果上手くいくときもいかない場合もあり、分かりません。でも本人は納得出来る。周りの人や親も勧めたりしてうまくいかなかったときは、また次の不幸を生むケースもある。これが第三者が支援できるかということで、第三者が支援するという言葉が一人

歩きすると、若者が社会化するという親も一緒になってオープンできることとか、みんな社会化していく、これは今後大きな課題となっていくと思う。基本的に親の依頼をしっかり受けとめ、それに応えようとしますが、あくまで本人の意思で出られたという演出をします。長い訪問支援は3年位。長いと親もあきらめる。あきらめたところからまた始まる。親は期待する。訪問しなくても親の会に参加して、親がどんなことを感じているか、親が変化したな、これだったら本人もいま楽だなと分かるようになる。そういう親御さんの変化を見たとき、何かあった時もしっかり腹括ってガンと受け止めなければならないときもある。親もしっかりそうなっているなど思った人は成功します。」(山田氏)

## 【お知らせ】

### 第6回 社会的ひきこもり支援者 全国実践交流会 in 岐阜

○と き：2月12日(土)～13日(日)

○ところ：岐阜大学(大講堂・地域科学部)〒501-1193 岐阜市柳戸1番1

○参加費：大人 3,000円(当日 3,500円)・学生 2,000円(当日 2,500円)  
懇親会 4,000円

○プログラム

記念講演 「若者の孤立と苦悩から豊かな支え合いへ・・・

小説「稲の旋律」に込めた思い」(仮) 旭爪あかねさん

○特別シンポジウム

テーマ「子ども・若者育成支援推進法とひきこもり支援」

シンポジスト

谷口 仁史さん(NPO法人 スチューデントサポートフェイス・佐賀)

佐藤 洋作さん(NPO法人 文化学習協同ネットワーク・東京)

小杉 礼子さん(独立行政法人 労働政策研究・研修機構・東京)

コーディネーター 山本 耕平さん(立命館大学・京都)

○テーマ別実践交流会

①就労支援と仕事おこし

②不登校・不登校後の支援のあり方

③発達障害とひきこもり支援

④ひきこもりと家族支援

⑤フリースペースにおける若者支援

⑥心の問題とひきこもり支援

詳細については、森下さん、東條さんから案内状のコピーを頂いておりますので、必要な方は川井までご連絡ください。

以上

1. 今後の運営に関する提案（どのようなことでも結構です）

2. 我が子の支援について

①今 一番必要としている支援は何ですか？

3. ひきこもり地域支援センター利用について

①利用したい

どのようなセンターを希望しますか。

②すぐに利用しようと思わない

理由（○をつけてください）

現在 他の医療機関、カウンセラーなど利用をしているから

どこで相談しても、あまり変わらないから

その他（ ）

4. KHJ 本部に対する運営費の支部負担についてのご意見など

（奥山代表が寄付金や行政からの補助金や事業の受託など、お一人で工面していたようです。）

※1月の例会時に回収させていただきます。参加出来ない方はFAX・郵送で川井宛お願いします。

（FAX：087-843-9877）

ご協力有難うございました。